

観音菩薩の宗教

⑦

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

さまざまな菩薩と観音の救いは殺物価格の高騰、戦争伝染病の蔓延であり、『俱舍論』の言葉を借りれば「三災」である。次いで日蓮は『葉師経』『仁王経』『金光明経』などから七難を抽出し、『他国侵逼難』と「自界叛逆」のみがまだ起きていないとして警鐘を鳴らした。他国侵逼難とは、『葉師経』のいう外国による祖国への侵略、「自界叛逆」とは内乱である。日蓮は「立正」すなわち『法華経』によって正しい法を立て、これらの災難に対処することによって「安国」すなわち国を平和にすることを主張した。その後、日蓮の予言が蒙古襲来として的中したことで、彼の評価は高まった。

鎌倉時代の高僧・日蓮は、『立正安国論』を著し、国や人々が被る災難にはどのようなものがあるかを考察した。『立正安国論』とは、モンゴル帝国が日本に侵攻しようとする前夜、外敵の侵入を予言し、幕府に国防を促すために執権・北条時頼に提出した書物である。まず日蓮は、『大集経』から「三の不祥の事」すなわち、「殺貴・兵革・疫病」を挙げた。これら

は殺物価格の高騰、戦争伝染病の蔓延であり、『俱舍論』の言葉を借りれば「三災」である。次いで日蓮は『葉師経』『仁王経』『金光明経』などから七難を抽出し、『他国侵逼難』と「自界叛逆」のみがまだ起きていないとして警鐘を鳴らした。他国侵逼難とは、『葉師経』のいう外国による祖国への侵略、「自界叛逆」とは内乱である。日蓮は「立正」すなわち『法華経』によって正しい法を立て、これらの災難に対処することによって「安国」すなわち国を平和にすることを主張した。その後、日蓮の予言が蒙古襲来としての中したこと、彼の評価は高まった。

観音信仰との関連で重要な「難」は、『法華経』『普門品』に相当する『観音経』に記されている。『立正安国論』は『観音経』の述べる災難を分類しておらず、また『観音経』自身も難の数を列挙していないが、観音菩薩を念ずると解消される難が十三回書かれている。『法華経』の多くの章は、始めに長行という散文、それと同じ内容を応偈という韻文体で繰り返す。『法華経』の「普門品」も同様で、その応偈が『観音経』として流布したものである。ここでは、その応偈の挙げる難の一部を見てみよう。以下は鳩摩羅什の漢訳からの拙訳で、括弧に入れた各々の「難」の名称は鎌田茂雄『観音経講話』（講談社学術文庫）による類別に一部筆者が書き加えた。「一」とい（誰かが）殺

に変わってしまふ（火難）。あるいは大海を漂流して、龍や魚や種々の鬼に襲われ、彼の観音の力を念ずれば、波に沈むこともない（水難）。あるいは須弥山の峰から推し墮とされても、彼の観音の力を念ずれば、（身体が）太陽のように空中に浮かぶ（須弥難）。あるいは悪人に逐われて金剛山から滑落しても、彼の観音の力を念ずれば、髪の毛一本すら傷つくこともない（悪人難）。あるいは盗賊に囲まれて、刀で斬られそうになっても、彼の観音の力を念ずれば、盗賊たちは慈悲の心を起こす（怨賊難）。あるいは国王に捉えられ、処刑されそうになっても、彼の観音の力を念ずれば、処刑の刀はぼろぼろに崩

立正安国論
振客来嗟曰自近与至近日
天震地支飢饉疫癘流瀆天
下屠道地上牛馬鬻鬻老弱
充路死者之尸既起太平之
後敢先一人控閭我幸利切即
是之文唱而教主之名我獲
病善治之願請東才如來經
我仰病即消滅不我死我病
即滅之福即生之句調百座百
之儀有目私密真言之教護
瓶之水有金生神入定之儀
隆聖觀之月普吉七鬼神之

『立生安国論』（略本）真蹟影印
（『日蓮聖人真蹟集成』第二巻、法蔵館より）

紙幅の都合ですべてを記せぬが、これに続き『観音経』はさらに蜚や雷などの災害を列挙していき、その難の数は十三に及ぶ。日本では流布しなかったが、チベットやモンゴルで大流行した『ガンダヴィユーハ・ストラ』も、さまざまな苦難・災難を挙げるとともに、観音菩薩に祈ることを説いている。この経典は、冒頭で観音菩薩が地獄や餓鬼・阿修羅といった世界で苦しむ衆生を救う有り様を描き、後半にいたりオーム・マニ・パドメー・フームという観音菩薩の六字真言の功德を説く（Studholme, The Origins of Om Manipadme Hum, New York）。死後、地獄などに墮ちることは七難などと並んで人々の怖れたところで、そこからは救いも観音菩薩に求められた。『ガンダヴィユーハ・ストラ』はチベット語に訳されチベット仏教圏で大流行したのち、北宋

の天息災によつて『大乘莊嚴寶王経』と漢訳され、漢民族にも六字真言は「唵嘛呢鉢訶銘吽」（大正大藏経二十巻、六一一頁中段）などと漢字で音写されて広まった。『西遊記』において孫悟空が岩山に閉じこめられ封印された際のお札にも同じ真言を写した「唵嘛呢叭呢吽」が記されていた。このシーンは手塚治虫らが制作した一九六〇年の東映映画『西遊記』にすら描かれている。『西遊記』における三蔵法師・玄奘は伝説的であるが、歴史上の玄奘のインドへの苦難の旅はその伝記『大慈恩寺三蔵法師伝』と『大唐西域記』に詳述された。その際、観音菩薩に救われたことは本連載の第五回で述べたので繰り返さない。ここでは日本において観音菩薩を篤信した藤原道長の例を見てみよう。藤原道長といえは、この世をば

わが世をと思ふ 望月の 欠けたることも なしと思へば（『小右記』）
と読み、自らの権勢を満月の無欠に喩えたとき、実際の彼の人生は苦難や悲しみの連続でもあった。『栄花物語』は道長の栄耀豪華を伝えた書物でありながら、そうした悲嘆が随所に述べられている。当時の宮中および道長の周辺は仏教一色といつてもよいほどで、『栄花物語』はどの頁を開いても仏教書と見まがうばかりの経典や仏菩薩、僧侶や寺院、法要の描写にあふれている。平安期の人々にとって物の怪の出現は日常茶飯事で、道長が故・具平親王の御霊と会話する場面もある（巻第十一「たまのむらぎく」）。なかでも道長を苦しめたのは自らの病であり、さらには愛しきひととの死別である。こうした精神的背景の中、

仏教や僧侶が果たした役割はきわめて重かった。道長は六女の嫡子を後朱雀天皇の后として入内させ、嫡子は親仁親王（のちの後冷泉天皇）を産むが、赤瘡（麻疹）にかかり急速に衰弱してしまう。病身の嫡子には物の怪も現れ、僧侶は読経をして平癒を祈る。最後は読経もやめて身分の上下、僧俗にかかわりなくすべてが「観音観音」だけ口にして念じたという。結局、嫡子は出産の二日後、齡十九で亡くなつてしまふ（巻第二十六「楚王のゆめ」）。観音力を越えた仏説「愛別離苦」の現実をつきつきられる。道長は悲嘆にくれるが、阿弥陀如来を祀る平等院建立で著名な道長たちが、苦難の最たるものたる病氣と死別に際し、その原因を鬼難や羅刹難と捉えて観音菩薩にすがったことは特筆されるべきである。



御奉納御札

このたび、八王子市にお住いの増山進・史子ご夫妻によりまして、新たに大本堂内に「水引」を御奉納頂きました。この水引は御本尊様が奉安されております。大本堂内陣と御護摩修行者が座る外陣を分けており、御本尊様を参拝される内陣回りの際に潜る幕となります。茲に謹んで重ねて御礼申し上げます。